講演録

坂本龍馬がめざした政治、社会

2015年度FUJITSUファミリ会 秋季大会 特別講演

土佐史談会副会長・理事／高知大学（共通教育）元非常勤講師 **谷 是** 氏

たに ただし 1939年高知県高知市天神町生まれ。1963年高知大学文理学部文学科（国文学専攻）卒業。高知新聞社入社。高松支社長、高知新聞企業（株）事業局長代理、同情報局長代理などを歴任。2000年高知新聞社を定年退職（在社37年）後、板垣会理事、土佐ジョン万会顧問、土佐藩ゆかりの会幹事などを務め、各地で土佐の歴史に関する講演活動を行い、歴史文化事業に関与する。油絵個展16回（東京、高松、高知で開催）。編著『高知県の不思議事典』『高知県人名事典・新版』『高知県謎解き散歩』（新人物文庫）。

「坂本龍馬」をつくった出会い

2015年は、坂本龍馬の生誕180年にあたります。日本の歴史の中で常に高い人気を誇る龍馬ですが、実際に彼が活躍したのは28歳から33歳までのたった5年間でした。郷士という下級武士の生まれで、いわば地方に住む一介の剣道好きの青年という存在だった龍馬は、28歳のときに土佐藩を脱藩し江戸に向かい、北辰一刀流の千葉定吉の道場に逗留します。その年の10月、土佐勤王党の藩士、間崎滄浪が福井藩主、松平春嶽に拝謁する際に龍馬も同行することになりました。そのとき春嶽から勝海舟への紹介状をもらい、赤坂にあった海舟の屋敷に出かけます。海舟とのこの出会いから、龍馬の活動が始まるのです。そのとき龍馬は実は海舟を切るつもりだったという説もありますが、海舟から世界情勢を聞くうちにすっかり心服し、その門人になることを決意したのです。

何もない素浪人だった龍馬にとっては、勝海舟という強力な後ろ盾が欲しかったことも事実だったと思います。また海舟にとっても、洋船に習熟した船員を育てる海軍操練所をつくろうとしていた矢先の出会いでした。龍馬は早速、近藤長次郎や千屋寅之助、望月亀弥太などの友人を集めたのです。各藩からの若者も集い、今の神戸に100名ほどの海軍操練所が誕生しました。操練所は幕府の施設でしたが、海舟はそこに自らの私塾を開くための宿舎も建設しようとしていました。しかし、自分の給料や手当ではとても足りません。そこで春嶽に5,000両の借金をするために龍馬を使いに出し、その交渉は見事成功します。

そのとき、龍馬にとってもう一つの素晴らしい出会いがありました。それは横井小楠との出会いです。元は熊本藩士で儒学者であった小楠は、優れた経済学者として福井藩に引き抜かれた人物です。春嶽が田安徳川家から福井藩に養子に入ったときには赤字であった藩の財政を、わずか5年で黒字にしたという大変な経済改革を行いました。彼はいわゆる重商主義を唱え、工芸品などの輸出で外貨を稼ぎ、藩を富ませることを目指しました。「経済」という言葉は小楠が唱えた、世の中をよく治めて民を救う「経世済民」を縮めた言葉です。このような数々の優れた人物との出会いにより坂本龍馬という人間がつくられていったのです。

優れた経済感覚、日本初の商社をつくる

龍馬が横井小楠の経済政策を満身に受けて帰ってくると、海軍操練所では、海舟の長州征伐の中途半端な後始末への批判や、塾生の望月亀弥太が池田屋事件に関わるなど、大きな問題が起こっていました。こうしたことがきっかけとなり海軍操練所は解散。残った龍馬たち脱藩浪士は、薩摩藩お預けの身となりました。薩摩藩はその頃イギリスと戦争した後で、海外との国力の差を痛感しており、洋船に習熟した人間を必要としていました。龍馬ら20名ほどの一行は長崎に向かい、豪商、小曽根乾堂の助けも借り、亀山という場所で商社活動を始めることになりました。これが日本初の商社といわれる亀山社中です。船と武器の売買をしながら龍馬は、薩長同盟を目論んでいました。当時、薩摩と長州が手を結べば、必ずや新しい日本が生まれると誰もが思っていたのです。しかし、第2次長州征伐が始まろうとする中、長州に武器を売ることは幕府を敵に回すことです。伊藤博文や井上馨が、グラバー商会などあらゆる商社に断られる中、名乗り出たのが亀山社中でした。龍馬たちは、武器を薩摩に売る形にして密かに長州へ運び、長州から薩摩へは不作で苦しんでいる米を渡すという経済交流を提案しました。このようなところが、龍馬の非常に優れた経済感覚だと思います。龍馬は少しずつ、薩長同盟への流れを築いていくのです。

しかし亀山社中では、持ち船が海難事故を起こすワイル・ウエフ号事件、いろは丸事件、イギリス軍艦の水夫2名が何者かに殺されるというイカルス号事件などが起こり、龍馬たちは窮地に陥ります。そこに登場してきたのが、土佐で開成館という商社の商館長を務めていた後藤象二郎でした。後藤も非常に交渉能力のある人物で、長崎で活躍していた龍馬に会見を申し込んできます。会う前は敵対していたといわれる二人ですが、ジョン万次郎とも親交があり世界情勢に詳しい後藤と、海舟や小楠から広く世界を学んでいる龍馬の時代感覚はぴたりと合い意気投合します。幕藩体制をやめさせ、日本の国を変えなければならないという二人の危機意識が一致したのです。倒産寸前だった亀山社中は、後藤の助言により土佐海援隊となり、土佐藩お預かりの身となりました。

国の進むべき姿「船中八策」

龍馬と後藤象二郎、それに海援隊で経理担当をしていた岩崎弥太郎の結束は非常に固く、土佐商会で再起した3人はこれからの国政について話し合います。このような中、船中で龍馬が後藤に口頭で語り、それを長岡謙吉が成文化してできたのが「船中八策」です。八つの策とは、まず一つ目は、すべての権力を朝廷一本にまとめる、つまり大政奉還を目指すこと。二つ目が、上下両院を設置して議会政治を行うこと。三つ目が、有能な人材を政治に登用し、これまでの制度にある有名無実な官職をやめること。四つ目が、不平等条約を改定し、貿易を強化すること。五つ目が、憲法を制定して法治国家をつくること。六つ目が、海軍力を増強すること。七つ目が、朝廷を護衛するための政府直属の軍隊である御親兵を設置すること。そして八つ目が、金銀交換レートの整備です。特に八つ目の為替政策は、とても龍馬らしい政策といえます。外国人を相手に商売をしていた龍馬は、為替レートというものが分かっていました。当時、海外では銀に対する金の価値が日本の3倍あり、外国人の商人たちは、日本に持ち込んだ洋銀4枚を、江戸時代の貨幣換算により日本の一分銀、さらに小判へと交換し、その小判金貨を海外で交換することにより最終的に洋銀12枚を得ていたのです。龍馬はこのからくりを知っており、日本からの金貨の大量流出を防ぐために為替レートを一刻も早く整備しなければならないと思っていました。龍馬は、日本が外国と肩を並べるような国になるためには、これら八つの方策が急務だと考えたのです。

船中八策は、後藤の進言により土佐藩主、山内容堂の手に渡り、土佐藩の大政奉還建白書となっていきます。 260年続いた徳川政権を朝廷に返すという大政奉還により、武力による討幕はひとまず避けられたのです。

世界を視野に、経済振興を提案

大政奉還により政権を朝廷に返すことが決まると、次に今後の国の行方を考えなければなりません。ここに至っても龍馬は、後藤に依頼された山内容堂の書簡を福井藩主、松平春嶽に届けるという仕事を引き受けます。龍馬はその頃、幕府に目を付けられ、非常に危険な身の上でした。しかし、彼は寝食も自分の命の危険も顧みず、日本の行く末を懸念していたのです。龍馬が最も心配していたのは、新政府をつくり上げるための資金がないということでした。幕藩体制が終わったといっても、 800万石の大大名といわれた徳川にはまだまだ力がある。本当にやる気になったらかなうものではありません。旧幕府側では、やれるものならやってみろという態度でいるはずです。政権が代わったのはほんの氷山の一角であり、海の中の見えない土台を経済でしっかりさせなければ新しい政府などすぐにひっくり返ってしまう。当時の志士たちの中で、龍馬ほど経済政策を真剣に考えていた人間はいないと言ってよいと思います。横井小楠の思想を実施した福井藩は、藩札の発行によって生産性を向上させ藩の財政を富ませた。新政府が紙幣を発行し流通させれば経済は振興する。越前で成功した例を日本全体でやらなければならないと考えたわけです。

龍馬はそこで、新政府の職制案である「新官制議定書」を提出します。これは、公家の最も徳望のある人間を「関白」にする。また、公家の優秀な人間を集めて「議奏」という最高決議機関をつくる。さらに「参議」、今でいう閣僚のようなものをつくり、新政府を始めたらどうかという提案です。このとき、新政府の想定メンバーに龍馬自身は含まれていません。彼の目は、そのときすでに世界を見据えていました。龍馬が考えていたのは、ロシアの南下に備えた北海道の開拓でした。さらに、朝鮮との関係まで彼の視野には入っていたのです。

龍馬が残したもの

龍馬の同志であった後藤象二郎はその後、大阪府知事となり、持ち前の交渉力をもって新政府の資金を集めました。岩崎弥太郎は、龍馬が夢見た世界の海援隊を実現するべく、巨大な財閥グループを形成していきました。海軍操練所時代から一緒の陸奥宗光は外務大臣となり、龍馬が提言した不平等条約の改正、為替政策に尽力しました。新政府の参議となった板垣退助は、船中八策の実現に命をかけ、後に一介の野人となって自由民権運動という大衆運動を起こし、国会の開設、憲法制定を求めていきます。また、福井藩士で龍馬と親交のあった三岡八郎、後の由利公正は、龍馬が願っていた日本初の全国通用の政府紙幣である太政官札を発行しました。

土佐には昭和初期に総理大臣となった濱口雄幸がいますが、彼は国際協調と呼ばれる路線にのっとり、市場としての中国の重要性を説き、中国との友好外交を主張しました。重商主義に関しては、戦後に総理大臣となった吉田茂も同様であったと思います。彼の父親である竹内綱は土佐出身の政治家でした。吉田茂は終戦直後、一刻も早く物資を調達して良い物をつくり、世界と貿易ができるようにする以外、日本が豊かになる道はない。世界には、戦争に負けても文化に勝ったという歴史がある。日本人の頭脳は優秀である。日本はそれを実践したらいいのだ――というようなことを言ったそうです。このように土佐の政治家たちは、龍馬の精神をずっと引き継いでいるのです。

龍馬は、外からものが見える人間でした。また、あらゆる人々に偏見を持たず、まずは会って話を聞いてみようという姿勢を常に持っていました。そうしていつの間にか膨大な情報ネットワークを築き、そのネットワークを駆使して状況のすべてを把握することができたのです。これが、一介の下級武士の出身でありながらスケールの大きな政治活動ができた理由です。龍馬の考え方や生き方を学ぶことは、現代の私たちにとっても、何か参考になるのではないかと思います。